

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 5 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520139

研究課題名(和文)ルーモールにおける美学と美術史学

研究課題名(英文)Aesthetics and Art History of Carl Friedrich von Rumohr

研究代表者

加藤 哲弘(KATO, Tetsuhiro)

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号：60152724

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：ルーモールは、美学と美術史学という2つの学科が近代的な学として成立する際に大きな影響を与えた人物である。しかし、この2つの領域で彼が残した多くの業績の相互関係や共通基盤については、これまで充分には明らかにされてこなかった。本研究では、このルーモールを、(1) イタリア初期版画研究(美術史学)者として、(2) 料理と食卓の社交哲学(美学)者として、さらには、(3) 多才な文人、画家、芸術後援者、美術教育者、愛国的貴族などとしてとらえながら、その業績を、同時代の同一のコンテキスト内に置いて分析することで、専門学科の枠組みには収まりきれないこの稀有な人物の歴史的、現代的意義を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Rumohr exerted a decisive influence at the institutional establishment of aesthetics and art history as modern academic disciplines. However, the interrelations between his accomplishments in these two adjacent fields and the common ground among them have not yet been made sufficiently clear. In this study, I have pointed out the historical and current significance of this rare person, whose work passes far beyond the narrow framework of these now specialized disciplines, by analyzing the multiple achievements of his (1) art-historical study about early Italian prints, (2) aesthetic study of the art of cookery or gastrosophy, and (3) his multi-talented literary activities, such as the labor produced by the same man in one and the same contemporary context.

研究分野：美学・芸術学

キーワード：ルーモール ルーモア 美学 美術史学史 料理術 イタリア研究

1. 研究開始当初の背景

(1) 発想に至った動機

ルーモール(Karl [Carl] Friedrich Ludwig Felix von Rumohr, 1785-1843)の名前は、その功績の大きさにもかかわらず、現在でも、まだそれほどよく知られているわけではない。もちろん、美術史学の歴史に興味を持つ者であれば、すでになされたいくつかの紹介によってその名を聞いたことがあるだろう。またドイツ語圏では、『料理術の精神』が早くから「レクラム文庫」に収録されたこともあって、一般の読者層には浸透していたようである。しかし、これは他の言語圏においても言えることだが、ただでさえ低いこのルーモールの知名度には偏りがある。美術史学史の研究者が『料理術の精神』に言及することは稀であり、一方、このロングセラーの読者が関心を持つのは、古代の料理をはじめとして当時のイタリアや伝統的なドイツの料理に造詣の深い著者の博識ぶりであって、彼が近代美術史学の基礎を築いた人物であることは、そのときすっかり忘れ去られている。

しかし、この2つの業績は、同じ1人の人物によって達成されたものであって、けっして無関係ではない。美術史学の基礎づけと、料理や食事、味覚と趣味についての哲学的議論という、一見大きくかけ離れているように見えるこの2つの側面を同じ1つの土台のうえで考察してみることはできないのだろうか？ このような疑問を抱いたことが、本研究を開始しようと研究代表者が考えるに至った主要な動機となった。

(2) 開始当初の時点での準備状況

研究代表者は、研究を開始した時点で、すでにいくつかの準備を整えていた。

研究代表者は、このときまでに、おもに世紀転換期におけるヴァールブルクやパノフスキーらによる解釈学的なイメージ論についてすでにある程度の研究を重ねてきていた。また、それと同時に、そのような研究の理論的実践的な土台となった近代初期における美術史学の成立過程についても、強い興味とともにその解明に努めていた。たとえば、2002年に執筆した論文「成立期の美術史学とコレクション フィオリロの場合」

」(『西洋美術研究』8, 158-170, 2002)では、1813年にゲッティンゲン大学で世界で最初の美術史学正教授に就任したフィオリロ(Johann Dominicus Fiorillo, 1748-1821)の業績とその歴史的意義についての考察を試みた。そこで明らかになったのは、フィオリロが、実制作の技術を教える「素描教師」、作品を管理する「コレクション監督官」、そして歴史学の一分野としての美術史の知識と理論を教える「大学教授」という3つの役割を同時にこなしていたということである。

本研究の対象となったルーモールは、この

フィオリロにゲッティンゲン大学で教えを受け、それを、さらにヴァーゲン(Gustav Friedrich Waagen, 1794-1868)やパッサヴァン(Johann David Passavant, 1787-1861)といった草創期の美術史家や美術館管理者たちに伝えた。そのため、文献研究に基く高度に実証的な美術史学研究を完成の域に高めたことで有名な、ウィーン学派のユリウス・フォン・シュロッサー(Julius von Schlosser, 1866-1938)は、ルーモールのことを「近代的な美術史調査研究の創設者」と呼んでいる。

また、研究代表者は、すでに2006年に論文「ルーモールと『料理術の精神』」(『人文論究』56(1), 57-71)を執筆して、この、師のフィオリロに負けず劣らず多才なルーモールについて、基礎的な調査と批判的考察を試みていた。しかし、そこでは、タイトルが示すように『料理術の精神』に重点を置いたために、彼と美術史学との関係については必ずしも十分な成果は得られていなかった。

研究代表者によるこの2006年の論文は、彼の代表的著作の1つである『料理術の精神』のテキスト分析を美学の立場から試みたものである。しかし、その点においても、ルーモールの美学と、たとえばカントや後のロマン主義者らによる哲学的美学とを、十分な準備のもとに直接対決させるまでには至らなかった。さらにいえば、美術史家ルーモールと美学者ルーモールを同じ土台の上で結びつけるという大きな課題の解決も、当時の研究全体の枠組みからの制約もあり、その後、持越さざるを得なかった。代表者がこの研究に取り組むことになった最大の目的は、これらの課題を解決することにあった。

2. 研究の目的

ルーモールは、美学と美術史学という2つの学科が近代的な学として成立する際に大きな影響を与えた。しかし、この2つの領域で彼が残した多くの業績の相互関係や共通基盤については、これまで充分には明らかにされていない。本研究の目的は、このルーモールについて、(1) イタリア初期版画研究(美術史学)者、(2) 料理と食卓の社交哲学(美学)者、(3) 多才な文人としての業績を調査し、その成果を同時代の同一のコンテクスト内に置いて分析することで、専門学科の枠組みには収まりきらないこの稀有な人物の歴史的、現代的意義を明らかにすることにある。

今回の研究では、研究対象をルーモール本人に絞り込んだ。そうすることで、美学と美術史学の双方にとって重要な意味を持つ、この特異な人物の活動を集中的に調査し、その歴史的、現代的意義について、ある程度まとまった結論を導き出したいと考えたからである。

そのためには、上記の3つの側面からとら

えられた個別の研究目的を、段階的に解決すべき課題として、具体的には下記のように、順次達成していくことが望ましいと判断された。

(1) 美術史学の実質的創設者としてのルーモールの実像を浮かび上がらせること

上述したようにルーモールも、草創期の美術史家らしく、絵画や版画のコレクション管理者や鑑定家であると同時に素描教師ないしは素描画家であり、かつ実証的な研究者としてアカデミックな世界での議論に参加している。本研究では、その中でも、有名な『イタリア研究』(1827-31年)だけではなく、1841年のイタリアの初期銅版画研究などにも注目して、彼の研究の「実証性」が具体的にどのようなものであったのかについて解明することも目的の一つとした。

(2) 味覚の生理学から美学(趣味論)への移行を明らかにすること

この時期に「美学」は、知的で「啓蒙」的な趣味の洗練と、野生的な自然や天才がもつ魅力とのバランスを巧みに保ちながら、その理論的な基盤を確立しようとしていた。食材から調理法、食事の作法、さらには健康のための減量法にまで筆がおよぶ『料理術の精神』の著者が、同時に、実証主義的な近代美術史学の成立に重要な役割を果たすことができたのは、おそらく、この「美学」という媒介項があつてのことである。研究のこの段階では、『料理術の精神』のテキストを同時代の多くの食文化哲学(gastrosophy)のテキストと比較するとともに、その背景となる社会事情(農業技術の進歩、植民地産物の流入、都市化によるレストランの増加)などを調査し、それらの結果をもとに、たとえばカントの『判断力批判』の記述を新たな視点から読み直すことも目的として念頭に置いた。

(3) 多彩な文人としてのルーモールの素顔を描き出すこと

ルーモールには、美術史学や美学の業績だけではなく、詩や小説などの、軽妙で啓蒙的な物語の著作があり、また旅行記や随筆の作家としても高い能力を示していた。さらに彼は、当時の知識人たちの基礎技術であつた素描にも優れ、また若いときには版画家になる夢を持っていた。専門分化の進行したわれわれの時代では想像しづらい、このような多様な才能の表れについて、本研究では、先入観にとらわれずに、できるだけ幅広く掘り上げることを目指した。そうすることで、最終的には、すべてをコンテクストの中に戻して、この稀有な人物のアイデンティティを確認することを試みたわけである。

3. 研究の方法

本研究では、上記の3つの個別課題を、以下のように各年度に振り分けて、そのそれぞ

れについて順次検討作業を進め、その個々の解決成果を最終年度にまとめるという方法を採用した。

(1) 初年度の研究は、実証的歴史研究としての「美術史学」の成立状況と、その際にルーモールが果たした役割について考察することを課題としていた。

ルーモールは、当初銅版画家になることを夢見ていた。また、後年にデンマーク王室に侍従として勤めたときも、コペンハーゲンにある王立銅版画収集についての著作を残している。作家を志し、作家志望の若者の後援者となり、王立版画収集の管理者を引き受けたルーモールが、なぜ「実証的」な研究方法に依拠するようになったのであろうか？

この疑問を解決するために、初年度にはとくに以下の3つの課題に取り組むことにした。

まずルーモール著作集全16巻(のうち、この時点で入手可能な15巻)および関連図書を備品として購入し、なかでも上記の2点のテキストの内容を詳細に点検すること。

さらに、この初年度には、美術史学にかぎらず、ルーモールの業績全般に関わる先行研究の収集と、その内容の吟味の作業も進めなければならなかった。日本では、吉岡健二郎(「ルーモール」『芸術的世界の論理』[京都大学美学美術史学研究会編]東京:創文社,1972, pp. 41-49)と太田喬夫(「ルーモールについて:19世紀初期の美術史と芸術理論の一考察」『美学と芸術学の間(1982/83年度科研総合研究[A]成果報告書』1984, pp. 65-79)による論考があるが、いずれも美術史学史内部での限定的な紹介にとどまっている。またドイツ語圏でも、伝記的なものを除けば先行研究はそれほど多くなかった。

ただし、ルーモールの故郷であるリュubeck (Museum Behnhaus Drägerhaus, Lübeck)で、2010年9月19日から2011年1月16日まで開催された展覧会「美術・料理術・家計術 カルル・フリードリヒ・フォン・ルーモール(1785-1843)と、文化史の発見」は、ルーモールについて初めて本格的にその業績を回顧するもので、研究上の視点も現在の水準に合致したものであった。基本的には、リュubeckという「郷土」からの視点が優勢になってはいるものの、カタログには、本研究にとって示唆的な論考も多く含まれていたため、その調査と分析に精力を傾けることにした。

この他に、本年度に、ゲッティンゲン、リュubeck、およびコペンハーゲンで、彼が見た版画やその制作と収集の現場についての現地調査を行うことも予定していた。

(2) 2年目となる平成24(2012)年度には、趣味(味覚)論としての「美学」の社会的背景を分析すること、そして、その内

部においてルーモールが占める位置を明らかにすることを課題とした。具体的には、次の3点に特に注目して考察を展開するという方法を使った。

同時代には多くの食文化哲学 (gastrosophy) が存在していたということ。したがって、本研究では、それらの諸テキストと『料理術の精神』を対照的にとらえることの有効性に注目した。たとえばド・ラ・レイニエール (Grimod de la Reyniere, 1758-1837) の『美食家の暦』(1803年)、ボーヴィリエ (Antoine Beauvilliers, 1754-1817) の『料理人の芸術』(1814年)、カレーム (Marie Antoine Careme, 1783-1833) の『王様のパティシエ』(1815年)、そしてとりわけ有名なブリリア＝サヴァラン (Jean-Anthelme Brillat-Savarin, 1755-1826) の『味覚の生理学』(1825年)などが検討対象となった。

食文化哲学が隆盛に至った背景には社会的要因 (農業技術の進歩、植民地産物の流入、都市化によるレストランの増加) が存在していたということ。本研究に関して言えば、とくにドイツ、フランス、イタリアの状況が示唆的である。さらには医学や家政学、礼法論などとも「食」は緊密な関係を保っていた。

カントの『判断力批判』における味覚や料理についての記述 (たとえば、第1部第1篇第1章第2節に見られる、イロクォイの首長とパリの焼肉屋) も本研究とのつながりで意義深い。この問題に接近するためには、ここで語られていることの意味を哲学的美学のアカデミックな枠を越えたところから引き出すことが必要になる。じつはカントのテキストには同様の記述が少なくない。カントもまた、宇宙物理学から食卓の娯楽に至るまで幅広い分野で多彩な才能を発揮する、この時期の大学教師であり、同じハンザ同盟都市を地盤とするルーモールとの共通部分が多い。

(3) 3年目となる平成25(2013)年度の課題は、ルーモールが「文人」として詩や文学、素描や版画などの領域で発揮した多彩な才能と、その美学や美術史学との関係を解明することに置いた。

ここでは、まず彼の著作の中から、『小説集』(1833年)と『犬と狐の戦い』(1835年)を採り上げ、そのテキスト分析を通して、彼の間人観や思想的基盤のありようを浮彫りにすることにした。

同時に、彼自身による素描や版画の作例の画面分析を行い、彼のコレクション哲学とともに、画像芸術に対する基本姿勢の解明を試みた。とくに注目したのは、ルーモールによる若い画家への芸術教育のあり方についてである。また、イタリアを訪れたルーモールらの周囲にいた「ナザレ派」の画家たちや、同時代のロマン主義詩人や哲学者、さらには歴史学者などの、いわゆる「ドイツ・レ

ーモール (ドイツ語圏から来たローマ滞在者) たちとの関係にも注目することにした。

上記の課題を解決するために、ローマ市内やローマ郊外の諸都市 (オレヴァノ・ロマーノなど) で、ルーモールが立ち寄った修道院や教会などを訪れて、資料の調査や収集を行うことにした。

(4) 最終年度の課題は、それまで継続してきたルーモールについての調査と分析を、同じ1つのコンテキストの中で生きた1人の人間の中で総合することにあつた。具体的な作業としては、以下の3点に取り組むことにした。

まず、ルーモールについてのトライリンガル (日、独、英) ウェブページを作成してインターネット上に置き、研究成果を公開するとともに、これまで接触できなかった未知の関係者や研究者との意見交換を試みることにした。

また、それまでの研究成果を、たんなる伝記的事実を寄せ集めた集合体としてではなく、1人の人物が、ある共通の社会的基盤のうえに作り上げてきたものとして提示する必要もあつた。そのための方策としては、特定のテキストが書かれた特定の時点を切り取って、その断面に並列的に立ち現れてくる諸要素を、共通の視点のもとで統合する手法が有効であるように思われた。具体的には、彼の著作のいくつかを日本語に翻訳して、訳者解説などの中でこの手法の応用を試みることにした。この翻訳によって多くの日本の研究者や読者たちとの意見交換も可能になることが期待されていた。

なお、この年度のヨーロッパ出張では上記のウェブページの内容に関連して、リュベックないしはミュンヘンで研究者たちと意見交換をするとともに、前年度に引き続きオレヴァノ・ロマーノで、今後の研究課題につながる、ルーモールと近代風景画との関連について、現地調査を行うことにした。

4. 研究成果

本研究の目的は、ルーモールについて、(1) イタリア初期版画研究者 (美術史学者)、(2) 料理と食卓の社交哲学者 (美学者)、(3) 多才な文人としての業績を調査し、その成果を同時代の同一のコンテキスト内に置いて分析することで、専門学科の枠組みには収まりきらないこの稀有な人物の歴史的、現代的意義を明らかにすることにあつた。それぞれの課題を各年度に割り振って解決していった結果、次のような成果が得られた。

(1) 平成23(2011)年度 (初年度)
「研究方法」の項で述べたように、初年度はとくに以下の3つの課題に取り組んだ。

ルーモール著作集の内容を詳細に点検すること。

ルーモールの業績全般に関わる先行研究の収集と、その内容の吟味の作業を進めること。とくに平成22(2010)年から平成23(2011)年にかけてリュウベックで開催された展覧会「美術・料理術・家計術 カルル・フリードリヒ・フォン・ルーモール(1785-1843)と、文化史の発見」に掲載された諸論考を精査すること。

ゲッティンゲン、リュウベック、およびコペンハーゲンで、彼が見た版画やその制作と収集の現場についての現地調査を行うこと。

以上の課題に取り組んだ結果として、ルーモールによる研究の「実証性」は当時の政治的コンテクストに具体的に強く制約されたものであったということや、版画に対する彼の知識や経験の主要な部分はゲッティンゲンの大学美術収集との直接的接触の中で形成されていたこと、さらには、この時期のドイツ語圏で隆盛を見るようになったロマン主義的な歴史研究が、「美術史研究者」としてのルーモールの誕生を促したのではないかといったことなどが新たに判明した。

なお、この年度内には、ロマン主義者たちとの交流やプロシアの銅版画収集との関連についての調査と分析が充分には実施できなかった。これらについては、次年度の課題とした。

(2) 平成24(2012)年度(第2年度)
当初の計画で2年次に予定していた課題は次の3点である。

同時代の多くの美食論や食文化哲学のテクストと『料理術の精神』との比較。

美食論や食文化哲学の隆盛をもたらした社会的背景の分析。

カントの『判断力批判』における、味覚や料理術関連の記述の意味づけ。

このうち、については、「食文化哲学(Gastrosophie)」という語を初めて使用したフーリエ(Francois M. Ch. Fourier)の「ユートピア社会主義」にもとづく共同体における食文化理論や、ルーモールとイタリアに旅行したロマン主義詩人ティーク(Ludwig Tieck)の風刺童話劇に見られる食事や調理についての描写などに注目しつつ、それらがルーモールの主張と極めて緊密な関係にあることを明らかにし、そこから得られた成果の一部を美学会西部会で発表した。

についても、当時のヨーロッパへの植民地食材の流入や、革命後のフランスにおけるレストラン増加などの状況などを、おもに文献などにより調査した。これらの社会的背景は、ルーモールの『料理術の精神』にも明確に見てとれる。

また、については、とくに同時代の、軽佻浮薄な「趣味」論と、それに対するカントやルーモールの批判的な姿勢を、やはり文献

分析を中心にして明らかにした。また、当初の計画にはなかった「ナザレ派」について、必要な文献購入と現地調査を行った。

このほか、7月に行ったドイツとイタリアでの調査では、マインツで開催中の「ナザレ派」展を観覧して資料の調査と収集を行い、カッセルとジェノヴァでは、ルーモールが『イタリアへの三つの旅』などで言及している絵画作品や聖堂建築などについて、資料の調査と収集を行った。

(3) 平成25(2013)年度(第3年度)

3年次に予定されていた課題は、ルーモールが「文人」として詩や文学、素描や版画などの領域で発揮した多彩な才能と、その美学や美術史学との関係を解明することであった。

この課題の解決のために、この年度には、ルーモールの第一次イタリア滞在をめぐる前年度からの研究成果を、論文「ルーモールのイタリア旅行(1805-06年) 食文化哲学と美術史研究のあいだで」(『人文論究』)において発表した。

それに続いて、この年度には、ルーモールの第二次イタリア滞在にとくに注目して、その際に彼が、ヴァイマルでその才能を見いだしてローマへと同行した若い画家のホルニーを、当時ローマに滞在中であった多くのドイツ語圏からの芸術家や「文人」たちとの交流のなかで、どのようなかたちで教育しようとしていたのかを、彼の旅行記や随筆などのテクスト分析を通じて明らかにした。この第二の成果は、竹林舎から刊行された、佐藤直樹編『ローマ 外国人芸術家たちの都』に所収の論文「ローマ滞在中のルーモール [ルーモール] ナザレ派との関連を中心に」によって公表した。

また、平成26(2014)年2月に行った現地調査では、ローマ市内および、ローマ郊外のオレヴァノにある、ルーモール(および、ローマに滞在中の芸術家や文人たち、とくに風景画家としての教育のためにホルニーを預けたコッホや、後援者として作品制作の支援を行ったオーヴァベック、コルネリウスらの、いわゆる「ナザレ派」の画家たち)が滞在した旅館や教会、修道院を訪れ、彼らが描こうとした理想的風景や宗教的理念がどのようなものであったのかを調査した。

(4) 平成26(2014)年度(最終年度)

最終年度の課題は、これまで継続してきたルーモールについての調査と分析を、同じ1つのコンテクストの中で生きてきた同じ1人の人間の中で総合することであった。そのための具体的な作業としては、ルーモールのテクストを日本語に訳し、彼についてのウェブページを作成するなどして、研究成果を公開することを予定していた。

ルーモールのテキスト翻訳については『料理術の精神』を選択することにしてきたが、最近になって、すでに中央公論美術出版社において翻訳の計画が、かなり完成度の高い状態にまで至っていることが判明したため、急きょ題材を変更して『イタリア研究』の一部を、紹介のかたちで訳すことに変えた。ただし本年度中の完成は困難であるため、完成した箇所から順次ウェブページ上に掲載することにした。

その他、本研究の成果発表の場として開設したウェブページには、本研究の概要、代表者による研究成果、ルーモールの年譜や著作、関係文献リスト、原典や肖像、素描作品などへのリンクなどを、原則として日英独3ヶ国語対応のかたちで掲載した。ドイツ語への対応が間に合わなかったところもあるが、全体としては、ほぼ当初の目的を達成したと考えている。

なお国外旅費による調査では、ルーモールがゲーテやホルニと出会ったヴァイマルと、彼がホルニをコッホに預けるとともに、ローマでの主たる滞在地としていたオレヴァノ・ロマーノを再訪して、今回は風景画についての彼の捉え方の近代性について改めて明らかにするための資料を収集した。この問題については、「イメージ人類学」という普遍的な視点からの視覚文化研究との関連で、今後も検討を継続したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 8 件)

加藤哲弘、イメージ人類学 その可能性と限界、人文論究、査読無、Vol. 58、No. 1、2015、pp. 119-139

加藤哲弘、オレヴァノ・ロマーノと近代風景画の成立?、西洋美術研究、査読無、Vol. 18、2015、pp. 218-220

加藤哲弘、ルーモールのイタリア旅行(1805-06年) 食文化哲学と美術史研究のあいだで、人文論究、査読無、Vol. 63、No. 1、2013、pp. 77-99
<http://ci.nii.ac.jp/naid/120005325013>

加藤哲弘、《硫黄島の星条旗》 勝者と敗者の情念定型、美学論究、査読無、Vol. 28、2013、pp. 1-19

加藤哲弘、ルーモールとその評価をめぐって、西洋美術研究、査読無、Vol. 16、2012、pp. 233-234

加藤哲弘、カルル・ローベルトと考古学的解釈学、人文論究、査読無、Vol. 61、No. 1、

2011、pp. 77-97

<http://kgur.kwansei.ac.jp/dspace/handle/10236/9822>

加藤哲弘、方法としての受容美学、美術フォーラム 21、査読有、Vol. 23、2011、pp. 25-30

加藤哲弘、視覚芸術における連続的物語叙述 「異時同図」概念の再検討、京都美学美術史学、査読有、Vol. 10、2011、pp. 1-38

〔学会発表〕(計 2 件)

KATO, Tetsuhiro、Raising the Flag on Iwo Jima: Pathosformel of Winner and Loser、19th International Congress of Aesthetics、2013年7月24日、クラクフ(ポーランド)

加藤哲弘、ルーモールのイタリア旅行(1805-06年) 食文化哲学と美術史研究のあいだで、美学学会西部会第289回研究発表会、2012年7月28日、同志社大学(京都府・京都市)

〔図書〕(計 2 件)

佐藤直樹編、佐藤直樹、加藤哲弘他共著、竹林舎、ローマ 外国人芸術家たちの都 (加藤担当部分:ローマ滞在中のルーモアナザレ派との関連を中心に) 2013、493(70-98)

アビ・ヴァールブルク / 伊藤博明 / 加藤哲弘 / 田中純、ありな書房、ムネモシユネ・アトラス、2012、768(passim)

〔その他〕

ホームページ等

http://web.kyoto-inet.or.jp/people/katottk/kaken2011_j.html

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加藤 哲弘 (KATO, Tetsuhiro)

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号: 60152724